

# おたる・しりべしの魅力を発掘する 小樽商科大学



塩谷神社の船絵馬。30面ある。左上：金毘丸。明治23年6月吉日、奉納。右上：海通丸。明治30年3月吉日、秋田県秋田市新町十九番地の坂井嘉一郎が奉納。左下：長丈丸。明治12年9月19日、塩谷村の今堀丈輔が奉納。右下：調査中の船絵馬の一部。



明治43年、塩谷村の久保田榮作、久保田アキが奉納。尾道の石工、市町定助の作。「取次」は尾道市中浜の富安佐助。



越前産の笏谷石製の灯籠。明治13年、塩谷村の堀内利兵衛が奉納。上部は別の石材で再建。利兵衛は徳源寺に笏谷石製の三十三観音を奉納している。



絵馬堂。多数の絵馬が奉納されていた。現在は倉庫として使用。



「合祀丸山神社記念碑」(昭和52年建立)。右奥は「伍助澤稲荷神社」の石碑(平成13年建立)。前者は大正5年、後者は平成10年、塩谷神社に合祀された。



第二鳥居。老朽化により平成26年に撤去され、令和元年6月に新しい鳥居が建立された。高さ5m、幅6m。



出雲狛犬の「構え獅子」型。島根県の宍道湖畔で採掘される来待石製。



慰霊殿。「紀元二千六百年」(昭和16年)に創立。発起人・創立者は当時の塩谷神社宮司・鈴木秀造。



明治43年、日露戦争の戦没者の霊を祀るために建立。その後、「支那事変」「大東亜戦争」の戦没者の霊を合祀。平成3年、オタモイ道路改良工事に伴い現在地に移設。

【参考文献】「忍路郡郷土誌」(1957年)、「小樽市史第七巻」(1999年)  
 【調査】鈴木穂積さん(鹽谷神社宮司)、支部昌鏡さん(鹽谷神社宮司補佐役)、中村右雄さん(鹽谷神社責任役員総代長)、皆川綾さん(鹽谷神社総代)にご協力いただきました。感謝申し上げます。



しおやじんじゃ  
**塩谷神社**

## ニシン漁や海運業で繁栄した、塩谷地区の総鎮守

小樽市内から余市方面に向かつて国道5号線を進み、塩谷地区に入るとしばらくすると、山側に鹽谷神社(以下、塩谷神社)の鳥居が見えてくる。同神社は小樽最古ともいわれる極めて古い歴史を持ち、延宝2(1674)年、近江商人の初代西川伝右衛門が現在地より海側の塩谷村大字塩谷出崎鮫淵(ほっけま)にニシン漁場を開いた際、番屋内の神殿に京都の伏見稲荷大社から分霊を勧請したことが創祀と伝わる。

寛政2(1790)年3月、場所請負人の西川准兵衛が鮫淵(884番地)に社殿を創建し、以来「稲荷神社」として塩谷村の発展とともに栄えてきた。主祭神は稲荷神として広く信仰されている「倉稲魂命(うかのみたまのみこと)」「五穀豊穰を守護する神」「大物主命」(全国の金刀比羅宮の主祭神で、海上交通の守護神)、「事代主命」(恵比寿と関わりが深い商売繁盛の神)を合祀し、ニシン漁や海運業などで賑わっていた塩谷地区の総鎮守として親しまれてきた。

社務所の向かい側にある絵馬堂には、塩谷村や佐渡、秋田など各地の船主たちが奉納した船絵馬が30面のこつていた。塩谷神社は小樽で最も多く船絵馬が奉納された神社なのである。第二鳥居の少し奥にある灯籠は越前産の笏谷石製で、青色の石がとても美しい。本殿近くには出雲狛犬、本殿前には尾道の石工が作った灯籠がある。

いずれも塩谷村が当時、北前船で賑わっていたことが伺える遺産である。神社は順調に発展し、明治19年8月には境内地が手狭になってきたため、現在の「ゴロタの丘付近」へ移転した。大正5(1916)年、四国の琴平神社の分霊を勧請した丸山神社(明治4年創立)を合祀。社名を「稲荷神社」から「鹽谷神社」に改称し、現在地へ移転した。昭和21(1946)年4月には宗教学法人令に基づく神社本庁所属の神社となり、同28年5月、宗教学法人となり現在に至っている。

明治初期から例大祭の神輿渡御行列の花形である「松前奴」は現在も伝承されている。松前奴は漁夫たちが豊漁を願って始めたと言われ、三つ巴の紋入りの前掛けと鉢巻きを身につけ、「ヤーキタリ」(奴が来た)と掛け声をかけながら、先端に房のついた約4mの棒を振り、ゆっくりと練り歩くのが特徴である。平成30(2018)年11月には「塩谷松前奴保存会」が結成された。

松前奴は成人26人で編成するが、ここ20年ほどは担い手不足のため、市内の中学生を中心に行ってきた。近年、各地の中高生も参加するようになり、数年後に大人奴の演技を披露できることを目指している。350年近くに及ぶ歴史を持つ塩谷神社は、いまも未来に向かって歩み続けている。

撮影：落合亮(小樽商科大学宮内局) 文章：高野宏康(小樽商科大学委員研究員)

